

幼児と親に豊かな博物館体験を 提供することを目指して

ーウィズコロナ時代における試みー

神奈川県立生命の星・地球博物館 学芸員 石 浜 佐栄子
加 藤 ゆ き
大 坪 奏
広 谷 浩 子

1. はじめに

博物館における展示やその解説の多くは、大人を対象として構成され、主に“文章”が無理なく読解できること（中学生～高校生以上の読解力を持つこと）を前提として内容や表現方法等が検討されている。しかし近年、博物館は幅広い世代の人々が利用し、家族や知人と一緒に余暇を過ごす場所の選択肢の一つとなってきた。なかでも発表者らが所属する神奈川県立生命の星・地球博物館（以下、当館）のような自然史博物館では、小学生以下の子どもが来館する機会が非常に多い。例えば2019年度の当館統計では、来館者のうち24.4%が小学生、13.4%が園児（3歳以上の未就学児）と、実に来館者の4割近くが小学生以下の子どもであることが分かっている。特に園児は、ここ数年で10年前の約1.5倍にまで急増し、もはや来館者の7人に1人が園児という状況である（なお2歳以下の乳児は発券・統計の対象外であるため、未就学児の来館者数は、現実にはもっと多い）。この幼児来館者の急増傾向は多くの自然史博物館や科学館でしばしば話題となり、その対応や解決が重要課題の一つとなっている。

文章を主体とした解説手法によって“大人のために”構成された展示を、“子どもにも”理解し楽しんでもらうために工夫をしている博物館も増えてきた。子ども向け体験コーナーの併設やデジタルデバイスによる展示システムなどは、一定の効果を上げているものの、文章に馴染みの薄い幼い子どもにはうまく対応できているとは言い難い。子どもは保護者が博物館との仲介者となり、一緒に展示を共有できたときに最も良く学ぶことができる（コールトン,2000）。そこで発表者らは、幼児～小学校低学年の子どもと、ガイド役となり得る保護者のセット（親子）に対し、どのような手法を用いれば親子の会話を誘発し、より豊かな博物館体験を提供できるのか明らかにすることを目的として研究を進め、博物館活動の新たな展開を試みている（JSPS 科研費 20K01132「幼児と親に豊かな博物館体験をいかに提供するかー会話を誘発する新たな展示デザイン（石浜佐栄子・加藤ゆき・大坪 奏）」）。

2020年以降、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて当館も長く臨時休館することとなり、実際の来館に伴う博物館体験を提供することが難しい状況に陥ってしまった。再び来

館者を受け入れることができるようになった後も、入館人数の制限や団体予約の中止、動線の一方通行化、展示に触れることや大声を出すことの禁止など来館者の行動を制限せざるを得ない状況が続き、幼児とその仲介者たる親に豊かな博物館体験を提供することが困難になってしまっている。本発表では、ウィズコロナ時代において発表者らが取り組んできたウェブサイトを通じた親子向けの発信や、展示を非接触でも楽しんでもらうために模索してきた試みなどについて紹介する。

2. コロナ禍におけるウェブサイトを通じた親子向けの発信

新型コロナウイルス感染症拡大のため全国で博物館等の休館が相次ぎ、当館も2020年3月からしばらくの間、臨時休館することとなった。学校も休校となり外出自粛が叫ばれる中、北海道博物館による「おうちミュージアム」の呼びかけなど、ウェブサイトやSNSを通じた発信が各地の博物館から行われた。当館も「ウェブで楽しむ地球博」というページを立ち上げ、学芸員が常設展示に関するエッセイをリレーする「学芸員の展示余話」、子どもたちに自宅周辺の自然を楽しみながら観察してもらうための「生きものDEビンゴ（石田,2022）」、開幕後わずか3日で休館となってしまった企画展「ゴンドワナ」を紹介する動画などを掲載することとなった（図1、*1）。

発表者らは、未就学児～小学校低学年の子どもと親と一緒に取り組める当館オリジナルコンテンツの製作を検討した。まずは、自宅で楽しみながら動物について知ることができる素材として「3種類のハト（ドバト・キジバト・アオバト）」「4種類の哺乳類（タヌキ・アナグマ・アライグマ・ハクビシン）」の子ども向け塗り絵を、各専門分野の学芸員が監修して委託製作した（図2上）。幼児にも親しみやすい絵柄で、塗りやすい線画の塗り絵である。色を塗りながら比べるという行為を通して、動物たちの体型や毛の色などの特徴を捉えたり、生息環境を考えたりしてもらうために、複数の動物を1枚の台紙に収めるデザインとした。台紙（ぬりえシート）だけではなく「ぬりえの見本とかいせつ（図2中・下）」も併せて公開することで、例えば『タヌキとアナグマは昔から日本にいる動物（在来種）だけど、アライグマとハクビシンは外国から運ばれてきた動物（外来種）なんだね』などと保護者が解説しやすくすることで親子の会話を誘発することを目指した。これらは「ウェブでたのしむ地球博」ページ内の「ぬりえひろば」にて公開中である。

また、2019年度の特展「アオバトのふしぎ」に関連して製作し、展示室内で読み聞かせを実施して好評を得ていたオリジナル紙芝居「アオバトたちのだいぼうけん～湘南アオバトも



図1 「ウェブで楽しむ地球博」
トップページの一部

のがたり～」に学芸員が読み上げ音声をつけた紙芝居風動画などを配信したり、自分がアオバトとなって森から海まで空の旅をしながら学べる「アオバトすごろく」を公開するなど、親子で楽しめるコンテンツの充実をはかった。

なお塗り絵に関しては、再開館したらまた博物館に来てねという思いを込めて「展示室にいる3種類のサル（チンパンジー・パタスモンキー・エリマキキツネザル）」を公開し、その後も「展示室にいる3種類の鳥（ダチョウ・オオハム・ミヤマカケス）」など展示室塗り絵シリーズを現在も引き続き展開している。今後は、実際に来館した親子を対象に、展示観覧とあわせてより豊かな博物館体験へ導くことを目指して更に活用していく予定である。

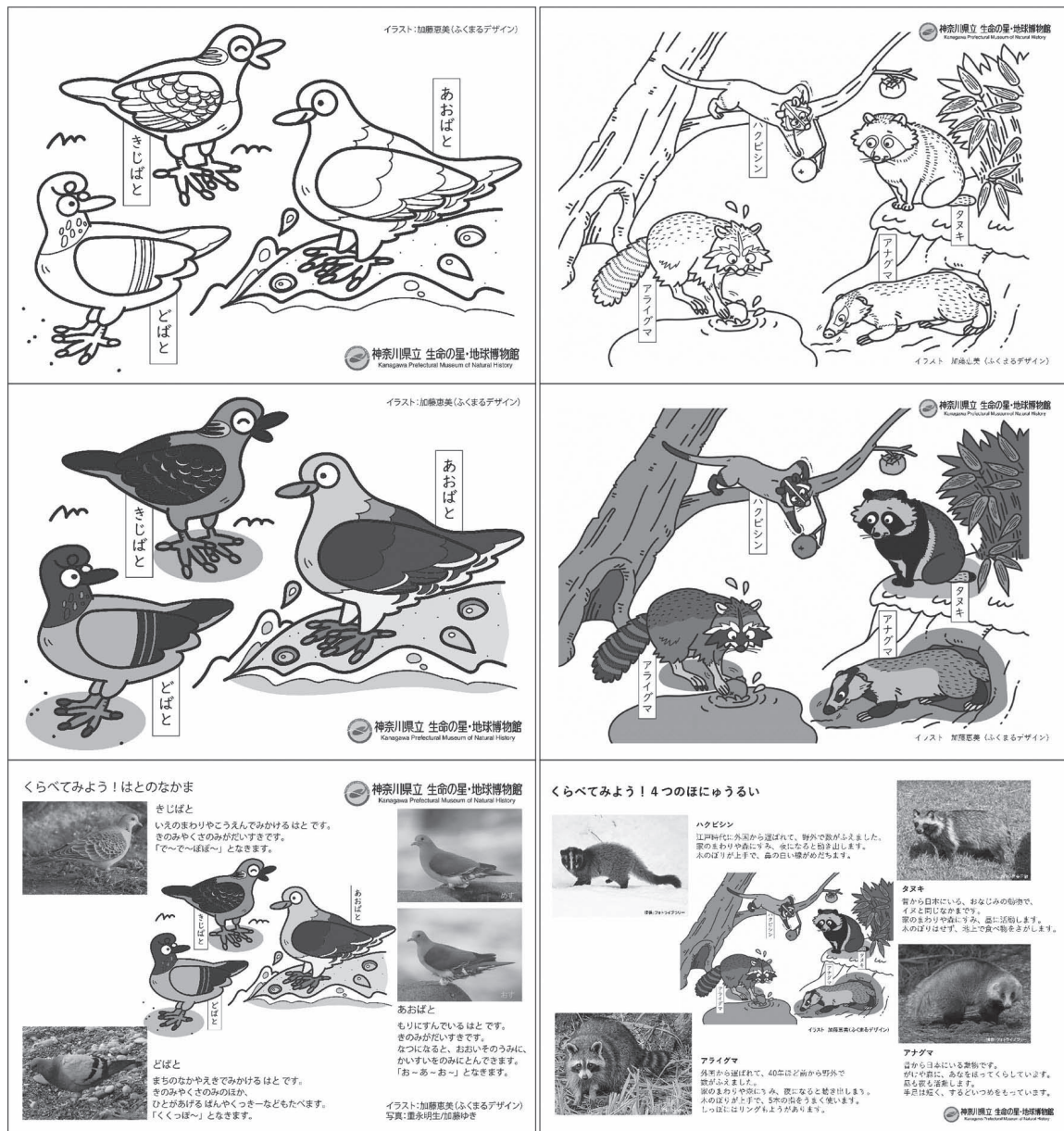


図2 「3種類のハト（左列）」と「4種類の哺乳類（右列）」のぬりえシート（上）、ぬりえの見本（中）、かいせつ（下）。それぞれA4サイズに印刷して使用【イラスト：加藤恵美（ふくまるデザイン）】

3. ウィズコロナ時代における特別展・企画展での試み

ウィズコロナ時代を迎え、博物館が再び開館した後も来館者の行動を制限せざるを得ない状況が現在も続いている。ハンズオン展示や対面での解説、ワークシートの配布などが実施しづらくなり、幼児と親に直接アクセスすることが難しくなってしまった。そこで、2021年に開催した特別展や企画展では、非接触型でも親子で楽しめるような工夫を模索した。

1) ポップを利用した展示内容の補完

2021年3月23日から5月23日まで、当館では企画展「かながわ発 きのこの新種展」を開催した。菌類の多様性や未記載種の多さ、神奈川県内で採集された標本をもとに新種発表されたきのこ、市民参加型の調査、標本を集め続ける意義などについて紹介する展示で、非常に博物館らしく意義深い内容ではあったものの、一般の来館者にとっては専門的で理解が難しいという側面もあった。関係者向け内覧会において実施したアンケートでも「子ども向けの言葉がほしい」「何かアイキャッチ



図3 子どもからの発話のきっかけとなる
平易な一言ポップ

になるものを追加しては」という意見が相次いだため、発表者らのチームで検討し、目に留まりやすく理解しやすい“一言ポップ”を展示の邪魔にならない範囲で追加することとした（図3）。担当学芸員から“伝えたいメッセージ”を聞き取り、「おほしさみたいだね」「かみの毛じゃないよ きのこだよ！」など平仮名主体の10～20字程度で短く表現してみたところ、ポップを注視したり声に出して読んでくれる子もあらわれた。ポップの存在によって標本に注目する機会が増えたり、内容の理解が進んだり、来館者が「わかった気分になり満足度が上がる」といった効果もありそうであった。

新型コロナウイルスの感染が拡大した状況で、学芸員が展示室に出て直接調査をするには来館者との距離の取り方が難しく、実際に親子の会話に繋がったかどうかまでは観察することができなかった。しかし子どもがポップを読み上げるなど、子どもからの発話（話のきっかけとなる発言）によるコミュニケーション出現の可能性が強く感じられた。やや難しく専門的な内容の展示でも、工夫することで、親子のコミュニケーションを促進し博物館体験を豊かにすることが可能であるという好感触を得た。

2) きのこ先生と子どもの会話により展開する展示

2021年7月22日から8月29日まで、当館ライブラリー横のミニ企画展示コーナーにて「昔のきのこ図鑑—今関六也菌類図譜の世界—」を開催した（図4）。菌類研究者であった今関六也氏の図鑑とその原図を紹介する展示である。夏休み期間中でもあり、昔の図鑑と研究スタイルを紹介しながら、自由研究のヒントにもなるような内容を念頭に企画を練った。

展示は、解説の間に“小学3年生の男の子（あーす君）”と“いまぜき先生”との会話を挟み込むかたちで進行させた。前述の「かながわ発 きのこの新種展」におけるポップ展示での成功を発展させ、展示製作後に足りない部分をポップで補完するのではなく、標本の周辺に2人の会話を展開させることをあらかじめ組み込んだ上で展示を構成した。小さな展示コーナーではあるが、子どもや親子連れが見入っている姿も観察され、わかりやすい“会話”が理解の手助けになっていることが感じられた。



図4 会話を挟み込んで進行させた「昔のきのこ図鑑 一今関六也菌類図譜の世界一」の展示全景

3) セルフデバイスにより非接触で回答を得られる展示室内クイズ

2021年7月17日から10月31日に開催した特別展「絶海の自然ー硫黄列島をゆくー」は硫黄列島の自然全般を紹介するとともに、無人島における学術調査の様子を伝える内容であった。パネルの解説も難解であり、総括的で多くの学術的情報を扱う展示に対して、どうすれば親子連れにアプローチできるのか検討し、幼児でも興味を持ってもらえそうな内容のクイズを展示室内に追加で掲示することとした。

普段であれば、パネルをめくってもらうことなどで回答を伝える事例が多いが、新型コロナウイルス感染症対策のため、開催期間中は展示やパネルを「さわらない」ことが求められた。問題や回答を紙で配布する方法もあるが、配布物を扱うこともあまり歓迎されない傾向があった。そのため、展示室内に掲示したクイズに対し、スマホなどセルフデバイスを使って非接触型で答えを得られる仕組みを考えた。

展示室内6ヶ所でクイズを出題し、クイズと一緒に表示したQRコードを読み込むと当館ウェブサイト内の「こたえとかいせつ」ページへアクセスできるよう設定した（なおデバイスを持たない来館者もいると考え、展示室内の隅にも答えの一覧を掲示した）。まずは子どもの低い目線を狙って床面に6ヶ所クイズを貼ったが、存在に気づかれなかったり、他の来館者が掲示の上に立ってしまうと見えないなどの事態が生じたため、全く同じ内容の出題掲示を解説パネル周辺や展示ケース横の低い位置などの壁面にも追加した（図5）。その際、どの掲示場所が

効果的だったのかを明らかにするために、床面の出題掲示と壁面の出題掲示からアクセスする回答ページを別々に作り、各ページのアクセス数を比較できるようにした。

展示室内で来館者の様子を観察したところ、クイズをきっかけとして親子で話が弾んだり、QRコードで回答にアクセスしながら話し合っている様子を見ることができた。しかし、親子がそれぞれ自分のスマホで別々にQRコードを読みこみ、近くに家族がいてもスマホの回答を見せ合うことも会話をするということもない…という光景を目にすることもあった。スマホという個人的なデバイスは、会話に繋がるツールというより、むしろ自分の中に情報を閉じ込め処理させる特性があるという可能性も感じざるを得なかった。また、アクセス数解析の結果、クイズの内容と掲示場所によってアクセス件数にはかなりばらつきがあり、出題内容や掲示場所についても試行しながら改善していく必要があることがわかった。

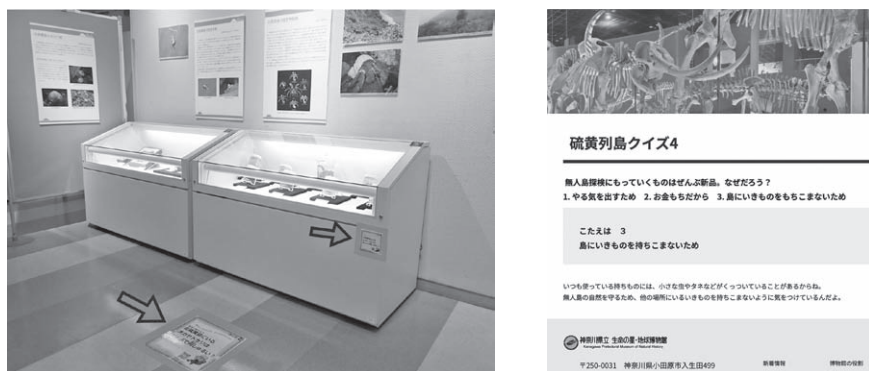


図5 床面と壁面のクイズ出題掲示（左）と、QRコードからアクセスできる回答ページ（右）

4. おわりに

新型コロナウイルス感染症に翻弄され、なかなか思うように幼児と親にアプローチできない事態が続いたが、ウェブサイトや非接触型の展示の試みにおける成功や失敗の事例を受け、少しヒントとなりそうな要素も見えてきた。今後は実際に来館した親子も対象に含め、豊かな博物館体験を提供するための試行と評価を繰り返していきたい。

なお本研究の一部には、JSPS 科研費 20K01132 を使用した。

引用文献・関連ウェブサイト

ティム コールトン（2000）ハンズ・オンとこれからの博物館．東海大学出版会．

石田祐子（2022）ウェブで楽しむ地球博「生きもの DE ビンゴ」の取り組み．全科協ニュース，vol.52, No.2（印刷中）．

＊ 1 神奈川県立生命の星・地球博物館 HP「ウェブで楽しむ地球博」

<https://nh.kanagawa-museum.jp/www/contents/1598970924181/index.html>